慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	P. Millett; Lending and borrowing in ancient athens
Sub Title	
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1994
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.63, No.3 (1994. 3) ,p.103(323)- 109(329)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19940300-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

P. Millett; *Lending and Borrowing in Ancient Athens*, Cambridge: Cambridge University Press 1991 (Pp. XIII+368, ISBN 0 521 37333 6, £ 40.00).

真下英信

一七～一八世紀、ヨーロッパでは、イギリスとフランスを中心に一大論戦が展開された。文学のみならず宗教や哲学、歴史観などを含む広範な領域にわたったこの論戦は、一般に「書物の戦争」と言われている。その論点は、近代が勝れているのか、古代が勝れているのか、いわば古代近代対比論にあった。この対立は、今なお時おり蒸し返されているが、ある人は過去を絶対視しようとするのに対して、ある人は己の時代を讃美すると言う人間本性に起因する論争と考えれば、未だ未解決なのも故無しとしない。

「書物の戦争」ほど遍く知られていないが、実は、古代ギリシアの経済史の分野でも同類の古代派近代派の対立が一九世紀末以来続いている。いわゆる Bücher-Meyer 論争である。論争の舞台はドイツが中心で、今から丁度一〇〇年前の一八九三年に出版された K. Bücher の *Die Entstehung der Volkswirtschaft*（『国民経済の成立』）がその契機であった。

周知の如く、本書は一九世紀的な発展段階説に従って、経済発展を geschlossene Hauswirtschaft（封鎖的家内経済）、Stadtwirtschaft（都市経済）、Volkswirtschaft（国民経済）の三段階に分類している。各々の段階は、ほぼ、古代、中世、近代に対応するが、勿論、彼はこれをもって歴史的事実を叙述しようとしたのではなく、単に経済発展を理論的に図式化して述べたにすぎなかった。

しかしながら、古代史の碩学 E. Meyer はこれに反対し、古代ギリシアの経済活動には従来考えられていた以

上に近代的側面があると主張して、史実をもって示そうとしたためにBücherとの間に論争が生じたのである。この論争は、結果的に、両者共にギリシア経済が近代的なのか古代的なのかと言う二者択一的な発想に拘泥した上に、経済発展は一直線的であるとの前提に立っていたために一種の袋小路に入り込んでしまった。だが、この対立は古代ギリシア史研究の発展にとって益する所大なるものがあった。BöckhやGroteなど近代的な古代ギリシア史研究の創設者に欠けていた経済史的な側面がギリシア史研究でも正当な地位を占める契機になったのである。

この論争を止揚し、より高次な視点から古代ギリシア史の諸問題を広く考察したのがM. Weberとその弟子Hasebroekであった。

Weberは、近代か古代かと言う選言的発想を捨て、中世都市との対比を念頭にポリス社会の本質を闡明しようとした。同じく、Hasebroekも経済のみを考察の対象とせず、それと政治との関係に着目してギリシアの都市国家の特質を考察した。彼は、今日的な経済政策の欠如こそポリス世界の経済活動の特質を解く鍵と考えた。こうして、彼等は古代ギリシア史研究に新側面を開拓したのであった。

だが、彼等の研究によってBücher-Meyer論争が解消したわけではなかった。例えば、ギリシア世界の拡大の重要な契機となった植民活動は、土地を求めての農業植民であったのか、それとも商業的関心が本質的な原因であったのか、未だ決定的な解答は与えられていない。また、ポリス世界の経済活動で銀行が果たした役割、借財の問題、そして商業の性格付けなど幾多の問題が依然として残っている。M. I. Finleyの言葉を借りれば、古代ギリシアの経済史と本格的に取り組むには、人はBücher-Meyer論争と正面切って対峙しなければならない事態にあることに今も変わりはないのである。

こうした中で、ハンガリー出身のK. Polanyiが近代以前の社会を研究する上に新しい概念を導入し、第二次世界大戦後の古代社会研究にも多大の影響を与えることになった。彼の思想は、我が国でも経済人類学の名と結び付いて広く知られているので、ここでその詳細を述べる必要はあるまい。その特徴は、要約すれば、人間社会を近代資本主義成立後の社会とそれ以前の社会の二つに分類する所にあろう。前者にあっては、経済は市場原理に基づいてそれ自体の法則で動いていく。だが、後者では、

経済は未だ独立した立場を獲得せず、広く社会に埋め込まれているとPolanyiは考える。従って、近代以前の社会の経済活動は、市場原理によるのではなく、それとは異なる〝互酬〟、〝再分配〟、〝交換〟と言う三つの概念で把握されるべきと彼は考えたのである。因に、経済活動を社会から抽出せずに、社会全体の枠内で理解しようとする態度はWeberのそれと揆を一つにしていると言える。

ここに紹介するP. Millettの*Lending and Borrowing in Ancient Athens*は、上述のBücher-Meyer論争を考察の視野に収めながら、Polanyi的発想を基底にして前四世紀のアテーナイの信用取引の実態に迫ろうとした書である。Cambridge大学に提出された学位論文を基に成立した本書は、専攻論文の手本と言えるが、論題から推測されるよりも遙かに広範な諸問題を扱っている。その主張の骨子は、(i) アテーナイ市民は、無利子の貸与による互恵的相互援助の網目の中に生活していた、(ii) 当時の負債、利子の概念は、今日の資本主義社会のそれとは異なる。信用取引は単なる経済問題ではなく、社会全体に埋め込まれており市民相互の贈与と互恵と一体になっていた、(iii) 銀行による貸与は、市民が頼る最後の手段でしかなく、多くは市民以外の人々になされており、市民の経済活動の中心的存在ではなかった、(iv) 互恵的な信用取引に根差した市民相互の援助こそアテーナイの民主制のエートスの表出であり、民主制の安定原因でもあった。

次に各章の内容を簡単に紹介しておこう。

第一章では、史料、研究方法、そして研究史上での著者の立場や主張など本書の大枠が提示される。利用する史料は主に法廷弁論である。従って考察の対象は前四世紀である。当時、市民間の貸借では無利子の互恵的援助が大きな比重を占めており、銀行の役割は従来考えられていた程大きくはなかった。そして、Bücher-Meyer論争を歴史的に回顧しながら、近代派に批判的な著者の立場が示されていく。洗練された信用形態は、発達した資本主義経済とは関係なく存在し得ることが第三世界の実例をみながら主張される。

法廷弁論では、富者は困っている人に無利子で金銭を貸与するもので、利子を取るのはあくどい人のやることとの主張がみられるが、これは利子により富を得ていた人がいた当時の社会の現実と矛盾する。なぜこうしたことが生じるのかを歴史的に考察するのが第二章である。

ギリシア語の〝貸す〟は〝与える〟を含意する。この用法はホメーロスのみか古典期の世界にもある。ヘシオドスの社会は、M. Mauss の言う互恵的社会で、利子は自発的に支払われるものでしかなかった。ところが、ポリスの発展に伴い、こうしたヘシオドス的なローカルで比較的平等な社会が残る一方で、より疎遠な人々の間での貸借も生じるようになった。この時、貸与の保証としての利子が一般化した。すなわち、上述の法廷弁論は、古い互恵的な社会と新しいポリスのより〝非個人的な関係〟からなる社会が前四世紀の信用取引に並存していた事実を示しているのである。

第三章は、かかる互恵的貸与が、当時のアテーナイ社会を色濃く支配していたことを示す。友人や隣人が提供する無利子の資金が、捕虜の贖い、嫁資、葬儀の費用など富裕者を含め市民の火急の必要を満していた。人が困っている時に援助するのは当然の義務と考えられていたのである。互恵的援助こそ当時の典型的な信用手段で、資本主義社会に見られる利得のために資金を借りると言う発想は基本的に欠如していた。貧民の借財が政治問題にならなかったのもかかる援助があったがためである。他方、前五世紀と異なり、被支配諸国から富を入手する手段を欠いていた富裕者は長期的には不安定であった。しかし、この帝国の欠如こそローマと異なる政治状況を生み、かつ民主制の安定をもたらしたのである。なお、彼の従来からの主張であるが、極貧の者が債務故に隷属民になっていたとの主張に対しては、異を唱える人もあろう。

第四章。利子論もなければ中央銀行による利率の決定もなかった当時のアテーナイ人の金利を近代の利子論で解釈するのは誤りである。彼等は、近代の経済学者が考えているような経済的合理主義に徹した人ではなかった。当時は、A. Smith 以来の経済学者が無視している営利を目的としない貸与が重要な役割を占めていた。利子は元来借り手が自発的に払うべきとの思想は、プラトンやアリストテレスにも生きている。なお、利率は危険率（海上貸付が好例）のみで決定されたのではない。友人などへの貸付は低利になる傾向にあったが、古代社会では概して固定的であった。

第五章は、Philia（友愛、友情と普通訳される）と言う多義的で翻訳しにくいギリシア語をキーワードに互恵的社会の実体を解明する。友愛は、一般に重要な社会関係とみなされていないが、ギリシアでは例外的に大きな

社会的役割を果たしていた。Philiaは、親兄弟に限定されず、同輩、同部族人、市民や軍人仲間さらには賓客など家を超えて存在し、我々の考える友愛以上に広義の概念で、相互義務を伴う構成員の実益を目的とした一種の組織である。Philiaに見られるお返しは義務であるとする互恵的な社会は、ホメーロスの時代から古典期まで連綿と続いている。古典期の信用取引は、こうした背景をもとになされていたもので、利得を目的としたものではなかった次第が次章で詳論される。なお、従来の学説に比較して、家の社会的役割を過少に評価し、Philiaを重視する著者の見解は今後議論の的となろう。

第六章は、親戚関係とは異質な、近隣の人々による非営利的な貸与がアテーナイ社会で重要な役割を果たしていたことを示す。

家族や親戚などの血縁集団は通説ほど安定した存在ではなかった。市民が困った時に援助してくれたのは、親戚よりも近隣の人々や公私様々のKoinoniaやEranosなどの相互援助組織であった。近隣の人とは、具体的には一〇〇～二〇〇人からなる区民で、彼等は互いに顔見知りで、人は遠方の親戚よりもたよりにしていた。彼等は、現金の貸与だけではなく、畑仕事の手伝いから鍋釜などの日用品、時には火をも借用し合っていた。家よりも、かかる組織がアテーナイ社会を支えていたのである。

他方、利子を徴収して融資する個人、神殿や組合もあったが、いずれも今日の投資家とは異質なものであったことが第七章で論じられる。

人の不幸に付け込んで利益を得ようとしない限り、利子を取ること自体は非難されなかった。かかる融資は、多く貸借両人の間に個人的なつながりが欠けている時に行われた。しかし、貸手である富裕者を経済的合理主義に徹し、最大の利益を目的に行動する近代の投資家と同一視してはならない（反Thompson）。財産は人から取るものではなく、農業の如く土地に手をかけて得るのが自然かつ正しいとの思想が時代を支配していた。しかも、富の蓄積は偶然かつ非組織的に行われている上に、その資産内容は今日の第三世界に見られるように、土地、家、奴隷、現金などが混在したものであった。だがこれは、ポートフォリオと呼べるものではなかった。彼等は投資家と言うよりも金利生活者であった。

また、融資をする様々の組合もあったが、これとても融資を主たる目的としてはおらず、やはり、組合員の友好や相互援助を意図していたのである。

第八章は、金貸しを職業としていた人々のタイプの分類とその社会経済的位置付けを考察する。

金融業の第一のタイプは、社会的に下層の人が営んでいた高利貸しである。これは、無利子の互恵的信用のネットワークから外れた貧民と特にメトイコイ達によって、短期かつ少額の資金の入手先として利用された。第二のタイプは、利益獲得のための巨額の資金の需要に応じた人々で、金貸し業者の中心的存在であった。海上貸付はその代表的業務であった。彼等も一般に〝低い身分〟の人であった。富者もいたが、政治には関心を持たなかった。最後のタイプは、銀行家である。近代の商業銀行の理論でもってギリシアの銀行を考察するのは正しくない（反 Bogaert）。彼等は、利子よりも、主に交換手数料で利益を得ていた。営業者の多くは外国人で、利用者も市民の互恵的信用などが得られなかった非市民が多かった。市民にとっては、銀行はたよるべき最後の手段でしかなかった。銀行は、いわば、営業、利用者の両面で市民団の外にあったのである。

最後の第九章は結論を述べる。

以上の要約から窺い知れるように、本書はアテーナイの信用取引を極めて多角的に検討している。著者は、これまでの研究成果を精力的に渉猟しているのみではない。Marshall、Robinson そして Samuelson らの書を俎上に載せている。その当否は、正直言って評者の力量を越えるもので判断し難い。しかし、本書が、アテーナイの経済に関心を持つ者にとって必読の書であることに間違いない。最後に、本書を一読し気付いた点（極めて個人的なことも含め）をいくつか述べて終りとしたい。

1．著者は、人と人との確執の証しである法廷弁論を資料にしながらも、市民相互の援助に基づく互恵的な温かな社会を描き出している。この矛盾をどのように考えたら良いのであろうか。

2．本書では A. A. Trever の *A History of Greek Economic Thought*（一九一六）が引用されていない。彼は、互恵がアリストテレスなどの経済思想の中で重要なテーマであったことをすでに指摘しており、本書と併せて読むと面白い。

3．今日、我が国でも Polanyi は良く知られているが、彼の著作を日本で最初に紹介したのは村川堅太郎であったと思う。評者の記憶が定かでないが、一九六〇年代中頃「古代史の会」で、彼は Polanyi らが編集した *Trade and Market in the Early Empires.*

Economies in History and Theory（一九五七）を批判的に紹介したのである。この紹介がいわばくちコミである経済学者に伝えられて、これを機に、Polanyi の名が我が国でも人口に膾炙するようになったのである。

4. 本書は、Philia にかなり大きな比重を与えている。実は、村川堅太郎も独自に異なる視点から Philia を研究していた。評者が、これを知ったのは、彼が亡くなられる一ケ月程前にやはり「古代史の会」でなされた発表によってであった。Millett よりも遙かに広い視野と遠大な構想の基に進められていた研究が彼の死と共に永遠に消え去ってしまったのは、千載の恨事である。

（付記：誤植　p. 165, 1353a→1343a
p. 296, VIII →VII　）

（1993. III. 14）